ダレカ

ニキは天使になりたいと言った。だから僕はこう言ってやった。
「無理だよ。だって、ニキはニキだもん」
それでもなりたいのだとニキは僕に向かって唇を尖らせた。眉間にぎゅっと皺を寄せていたのは、泣きそうになっていたのをこらえるためだったろうか。ニキはちょっとしたことですぐ泣くから、よく僕が泣き虫泣き虫とニキをからかっていたのが結構堪えていたのかもしれない。ニキの背中では、小さな一対の白い翼がはたはたと動いていた。
僕はそんな彼女の翼を、何の感慨もなく見やっていた。
ニキは傍から見れば確かに天使にしか見えなかった。
つぶらな瞳に愛らしい顔、華奢な体つき、透き通るように白い肌、艶やかなダークブラウンの髪、そして何より、その小さな背中に生えた一対の翼。
何も知らない人間が見たら、まず天使と思いこむこと間違いないだろう。
でもニキはニキでしかなかった。ニキはあくまでニキであって、本人がどんなに強く願ったところで、あの清純な天使にはなれないのだった。
――今日ね、天使？ って聞かれたの。
夕方、いつもの場所に行ったら、ニキは僕の方を見もしないでぽつりと虚空に言葉を投げかけた。その姿があんまり寂しそうだったから、僕は、また？ と呆れた声音で言うことができなかった。
――何で天使だと思ったの、って聞いたの。
相変わらず僕の方を見向きもしないでニキは続けた。
僕が聞いていることを前提に話しているのか、それとも聞かれなくてもいいからただ胸の内を吐露したいだけなのか、どちらなのかは分からなかったけれど、僕はひとまず彼女の話を聞くことにした。
ニキが素直になれる相手は僕くらいなもんだから、僕までニキを無視してしまったら、ニキは誰にも心を許すことができなくなってしまう。流石にそれは可哀想だと思ったし、僕自身ニキが独りぼっちになってしまうのは望んでいなかったから、ニキの誰に向かって言うでもない愚痴を聞くのは自然の流れだった。
――そしたらね、だって翼があるから、ってその人は言ったの。
僕が続きを促す必要はない。ニキは勝手に今日あったことを明らかにしていく。
――翼があるから天使なの？ 翼がなかったら天使じゃないの？ って聞いたの。そしたら、その人は口をつぐんじゃって、答えてくれなかった。
とここでニキはようやく僕に顔を向けた。実際に涙こそ流しはしなかったものの、今にも泣きそうであることは窺い知れた。
――ねぇ。どうやったらニキは天使になれるのかな？ ニキ、天使になれるなら何だってするよ。どんなにつらい試練だって耐えてみせるよ。だから、ねぇ、教えてよ。どうやったら天使になれるの？翼があるだけじゃだめなの？
「無理だよ」と僕は言わざるを得ない。
どうやったって、ニキはニキであって天使ではないのだ。
いくらその背に翼を与えられたからって、天使になんかなれやしないのだ。それはニキにもちゃんと分かっているはずだった。分かっているはずなのに、ニキはどうしても求めざるを得ないのだ。
予想通り、ニキは顔をくしゃくしゃに歪めて僕を見上げた。
――そんなこと、言わないで。もしかしたら、なれるかもしれないじゃない。
「そうは言っても、無理なんだよ。ニキはにきなんだから」
――なら、どうしてニキに翼をくれたの？
「ニキが望んだからだよ」
――ニキは、天使になることを望んだ。
「うん。でも、そのために翼がほしいと望んだじゃないか」
――本当は天使になることを望んだの。
「それは、駄目だよ」
――どうして？
「だって、ニキは笑鬼（ニキ）だから。ニキは笑鬼として生まれたんだから、自分の存在をどんなに憎んだところで、

ニキはニキであることをやめられない。天使になるということは、ニキがニキでなくなってしまうということだから。それは、宇宙の理に反する。生き物は、どうあがいたって、どんなに望んだって、自分以外の存在にはなれやしないんだ。自分であることをやめるとき、それは、その生を終えるときなんだよ」

――それでもニキは天使になりたい。人の笑みを食べて生きる鬼よりも、人に笑みを与えられる天使になりたい。

そう言ったきり、ニキは黙り込んでしまった。僕は何も言うことが思い付かなかったから、とりあえず彼女の小さな頭をそっと撫でてみた。ニキは俯いて、何の反応も示さなかった。涙を流すこともしなかった。

ニキは、自分という存在を憎んでいた。恥じていた。

人の笑み、喜びを喰らうことで自身を存続させる生き物、笑鬼。自分が生きるために、代わりに誰かを不幸にせねばならない哀れな生き物。それが、ニキだった。

神は、何故こんな生き物をこの世に送り出したのか？

笑鬼という生物をこの世に送り出すことで、この世に何か利益が生まれるとでもいうのか？

きっと、ニキの存在を知ったひとの多くがこう思うことだろう。実を言うと僕自身、そう思っている。

つまり、僕にもその問いに対する答えはわからないのだ。

ただ、僕はニキを愛している。それだけは真実だった。確かにニキは生きるために誰かを不幸にせねばならないし、必要に迫られてのことでなくて、不必要に他人を不幸に陥れることも多々あったけれど、それでも僕は、不条理の塊のような存在である彼女を愛していた。

だけれど、ニキ自身がニキを愛していなかった。いや、愛していたからこそ自身を憎んでいた。

僕はそれが悲しかった。ニキに、ニキ自身を素直に愛してほしかった。しかし僕は僕であってニキではないから、いくらニキに諭したところでニキ自身が自分で気づかなければ、ニキは自分を本当に純粋に愛することはできないのだ。それが分かっていたから、なおさら歯がゆかった。僕にはどうすることもできない。全知全能である僕にはちからはあるけれど、それを愛する生き物に行使することはできないのだ。僕にできるのは、ただ、ニキのことをそっと見守ることだけ。

次の日も、ニキは落ち込んでいた。

どうしたの、と尋ねても、ニキは力なく首を横に振るだけで、すっかり肩を落としてブランコに腰掛けていた。そのブランコはニキの特等席なのだ。

「ニキ、話してごらん。僕でよければ、愚痴でも何でも聞くからさ」

そう声をかけても、ニキはやっぱり首を横に振るだけで僕の方を見向きもしなかった。

勝手でわがままなやつだと内心思わなくもなかったけれど、ニキは今、自分のことで手一杯なのだから仕方がないのだろう。

僕はとりあえず彼女の傍らに立って、山の向こうに沈み行く朱色の球を眺めていた。その球は、ニキの顔を朱く染め上げていた。

まるで、彼女を追い立てるかのような激しい色に、僕には見えた。

彼女は何かに追い立てられているのかもしれない。

沈黙のまま一時間が過ぎた。
辺りはすっかり暗くなって、人通りも全くなかった。街灯がぼんやりと頼りなく辺りを照らしているが、それが逆に不気味だった。眠くてやる気が出ないのかもしれない。たった二人のために、明るく照らすなんて労力の無駄遣いだとでも思っているのだろうか。
僕がそう思いながら街灯を見つめていると、不意にニキがブランコをこぎ始めた。こぎながら、歌を口ずさみ始める。メロディはどこかで聴いたことのあるものだった。耳をよく澄ましてみると、歌詞の内容が意味のある言葉となって僕の鼓膜を振るわせた。詞は、初めて聴くものだった。

明日なんて来なければいいのに
今日も明日も変わらない私なんて嫌よ
未来なんてちっとも明るくない
私はダレカになりたい
私でないダレカ
幸せなダレカ
幸せを運ぶダレカ
私はダレカになりたい
そうすれば皆幸せ
未来だってきっと明るくなるのに

「やめてくれ」
僕は思わず耳を塞いで呻いた。ニキはブランコをこぐのをやめたついでに歌うのもやめた。ブランコのふり幅が徐々に徐々に小さくなっていく。いつの間にかニキが僕の顔をじっと見つめていた。その瞳にはただ、深いブルーの光だけがあった。顔自体には何の表情も浮かんでいなかった。
「ニキ、何度言ったら分かるんだ。ニキはニキであって、他の誰かにはなれやしないんだよ」
――分かってる。
「ならなんでこんな歌詞を作ったんだ」
――だって、どうしてもニキは天使になりたいんだもん。笑鬼なんて、嫌だ。
そう言って、口を尖らせるニキ。僕は怒りを通り越して呆れを感じた。声を荒げる気力さえ失せた。
「嫌だといっても、ニキは笑鬼なんだから。仕方ないじゃないか。そんなわがままを言ったところで、何も変わりはしないよ」
でも、と抗議するかのようにニキの小さな翼が激しく羽ばたいた。
それでもニキの小さな身体が宙に浮くことはなかった。
僕はやっぱり、何の感慨もなく彼女の白い翼を見つめた。
ただ、背中から生えているだけの翼。
何の役にもたたない翼。
ふわふわした白い羽毛だけが、街灯の淡い光を受けてかすかに輝きながら宙を舞った。
羽毛は地面に着地すると同時に、まるでシャボン玉のように軽く弾けて消えた。儚かった。
「ねぇ、ニキ」
僕は膝に両手をついて、少し前かがみになってニキと目線を合わせた。ニキはブランコの鎖をぎゅっと握りしめ、僕と視線を合わせる。口は相変わらず尖ったままで、眉間にはかすかに皺が寄っていた。深い色を灯したつぶらな瞳に、困ったような表情をしている小さな僕が映っていた。
「ニキはニキで、完璧なんだよ。ニキはそう思わないかもしれないけれど。ニキは可愛いし、本当は優しいし、頭だっていいし、ひとのことを恨んだり怒ったりしないし。生きるためにひとの幸福を食べていかなければならないのは、確かにニキにとってはすごく嫌なことなんだろうけど、でもね、ひとは皆、生き物を食べなきゃ生きていけないんだよ。不殺生主義を掲げるひとだって、どうしたって植物や動物の命を食べない訳にはいかない。それは、罪を作ることだけ

れど、仕方のないことなんだよ。生き物は生きていく上で、罪を作らずには生きてはいかれない。大切なのは、そのことを自覚して、罪を必要最小限におさえること。いかに罪を償っていくか、ってこと。償い方には色々あるけどね。一所懸命に自分の生を感謝して生きるというのも、償い方のひとつだと僕は思うけれどね。ニキは自分が罪を作っていることを十分自覚しているし、ひとの役にたとうという気持ちだけは十分ある。あとはそれを実際の行動に移すだけだよ。それだけで、ニキは本当に完璧な存在になれる」

ニキは肯定も否定もしなかった。

ただ、僕の目を真正面からじっと見つめて、無表情を保っていた。瞳がわずかに揺れた気がしたけれど、それは僕の気のせいかもしれなかった。

翌日。

いつもの場所に、いつもの時間にやってくると、いつもニキが座っているブランコに小さな女の子の姿はなかった。不思議に思って辺りを見回してみると、すぐに見つけた。くねくね曲がったトンネル式のすべり台のてっぺんに、彼女は風に髪をもてあそばれながら立っていた。

どうしてそんなところにいるの、と声をかけようとして、躊躇われた。

ニキは真っ直ぐ睨みつけるようにして空を見上げていた。そんな彼女の様子があまりに厳粛だったので、声をかけることでその厳粛さを破るのは彼女に対してものすごく失礼なことであるように思われた。

だから僕は待つことにした。

彼女が、空から僕に視線を移すようになるまで。

とりあえずすべり台の元に歩み寄って、彼女の近くで僕は待った。待つことには慣れていたから、一、二時間待ったところで何も苦痛を感じはしなかった。

ニキとの付き合いに限らず、あらゆるひとと付き合う際に待つという行為はとても大切なものなのだ。

待っている間も、雲は空をゆっくり駆けていった。空のグラデーションが青から次第にピンクや朱色やらを含む暖色系のものになり、やがて星がちらほらと見え始める頃には暗い闇が視界の端から忍び寄ってきていた。どんなときも、空は美しかった。空には自分を嫌う要素など何もないように感じられた。ただ空は、自分を愛し、自分が自分で在ることを感謝し、地上の生き物たちを優しく見下ろすという使命に徹していた。

――考えたの。

唐突にニキが口を開いた。見上げると、ニキの姿は先程までニキが立っていた場所にはなく、代わりにすべり台の下からニキが現れた。ニキは滑り終えるとスカートをはらって、僕の元に歩いてきた。

――ニキはニキであって、天使ではないって。

そうだよ、と言う代わりに僕は頷いた。何を言っても、彼女が言葉を紡ぐ動作を邪魔することになりそうだったからだ。僕は黙ることで彼女の言葉の続きを促した。

――翼があるからって、天使にはなれない。翼があるからって、ニキはニキ以外の者にはなれない。ニキはどうあがいたってニキでしかない。それなら、ニキはニキであることに一所懸命にならなければいけないんじゃないかって。

僕はまた頷いた。ニキは一呼吸置いて、続けた。

――ニキは、どうしても自分が嫌いだった。ニキはニキであることをやめたかった。天使になって、皆を幸せにしたかった。でも、ニキ、本当にそれは天使にならなければできないこと？って自分に訊いたの。本当に別のダレカにならなければできないこと？ って。そしたら、違うんじゃないか、って思った。ニキ、自分に嫌いなところたくさんある。でも、どうしたって自分を大っ嫌いにはなりきれないんだって気づいた。そう気づいたら、ニキ、自分のままでもいいんじゃないか、って思った。まだまだ嫌なところはたくさんあるけど、でも、自分であることまで捨てる必要はないって、思った。

ニキは僕にくるりと背を向けた。スカートの裾がひらりと舞った。軽やかとまではいかなかったけれど、随分軽くなったようだ。翼も風に揺られてはためいていた。

――ニキは自分が嫌い。でも、大っ嫌いでもない。ニキはニキであることをやめられない。なら、ニキはニキであることを頑張るしかない。

まるで自分に刷り込むように、ニキは何度も何度も同じことを繰り返した。それこそ、僕が聞き飽きるまで。それでも僕はそんな彼女を微笑ましく思った。愛おしく思った。

やっぱりニキはニキなのだ。ニキであるからこそ素晴らしいのだ。

いつの日かそのことに本人が気づいてくれることを、僕は心の底から願った。

FIN